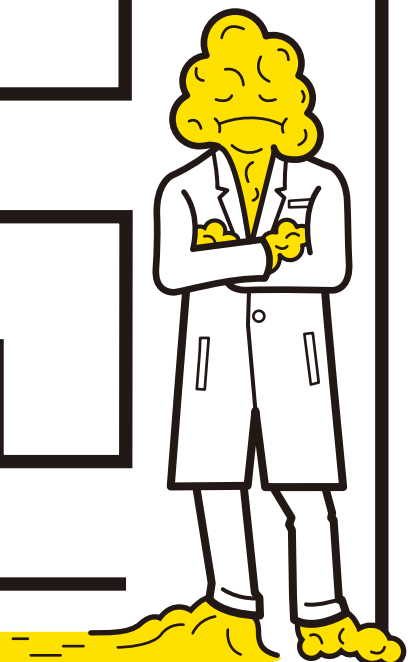
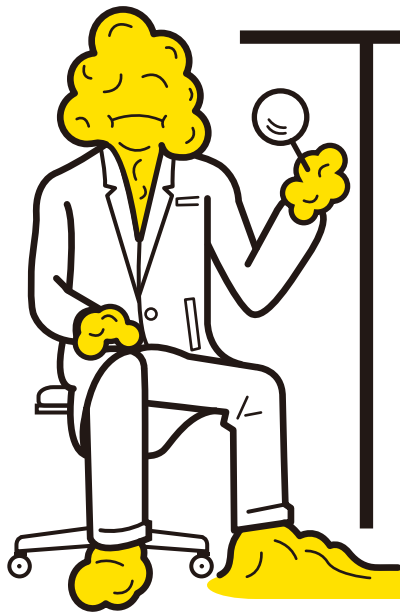


ぶっちゃけインタビュー
中垣俊之（なかがきとゆき）
「ねんきん生活者」(自称)
北海道大学電子科学研究所教授

15

脳のない粘菌が 迷路を解く



里見喜久夫(コトノネ編集部)＝インタビュー
interview by Kikuo Satomi
渋谷文廣＝写真
photograph by Fumihiko Shibuya

中垣さんの著書『粘菌 その驚くべき知性』(※1)には、「粘菌は、原形質と呼ばれる物質の固まりである」とあった。物質が生き物であることだけでも驚きだった。しかも、脳はおろか、細胞同士をつなぐ神経系もない、単細胞のアメーバ状生物なのに、迷路を解く知性があることを、中垣さんは実験で示した。その結果、イグノーベル賞(※2)にも輝いた。単細胞に知性があるなら、人間の立場がない。間かなくては。とことん、人間の傲慢さを思い知らせてもらおう。

—先生は、粘菌の研究者ですよ。粘菌はアメーバ状生物ですから、肩書は生物学者でいいのですか。

考えたことがないですね。そもそも肩書きがあるんですか。あえて言うなら、「ねんきん生活者」としてください(笑)。

—その名前をいただきます(笑)。ねんきん(粘菌)暮らしに入られたのは、いつごろからですか。

大学の四年生です。薬学部で粘菌

をやっている研究室に入って出会いました。変な生き物だけど、ちゃんと生きてるんだ、と興味がわきました。

—生物らしくないところに魅かれた。生き物というより、まるでマイクロブームを伸ばしたみたい。カビのようにも見えました。ただ、細胞の中には血管のような活発な流れが見える。一分間隔ぐらいで脈動し、一時間に二センチくらい塊となって動いていく。とてもビビッドでした。

—流れているが見えるんですね。血管みたいなのを切ると、ワースト液が噴き出します。

—これは、おもしろいなあと。そうですね。ただ、研究室では、ぼく以上に気持ちの入っている人がいました。

—嫌らしいことをお聞きしますが、粘菌の研究で、将来の仕事につながるのか、教授になれるのか、とかはお考えにならなかったのですか。

—学者に憧れはありましたが、それは優秀な人のやる仕事だ、と思っていました。大学では美術クラブに熱中しすぎて、それがもとで留年になるほどで…。でも、芸術家になれるわけでもない。ただ、何か表現するというのが、好きだったんです。

—科学研究は誰がやっても同じようなものになるっていうわけではなくて、ぼくは、こういうふうな物事を見るっていう立場表明みたいなものが現れる。客観的なだけではなく、科学研究も一つの創作なんです。捏造するのではなく、自己表現でもあることに気づいて、おも

しろくなりました。逆にいうと、そういうニエアンスの人らない、科学研究っていうのは、ぼくにとって魅力がないんです。

—先生にとって、科学研究もアートだったわけですね。

—そうですね。だけど、先輩とか先生を見ていると、非常に優秀なんです。憧れるけれど、研究職を諦めて、修士課程を終えて、製薬会社に就職しました。—薬学部を出て、とても自然なコースですね。で、また粘菌の元に戻ってきたのは？

—三〇歳を過ぎたころです。自由な、アートな世界を生きてみようと思いついて、博士課程に入りました。多少の蓄えはあったので、博士課程二年間は自分のやりたいことをやってみよう。そのあと二年くらいは外国で経験をしてみよう。それで、もう本望だ、と決めました。その五年間を終えれば、後はどうなるかという。生きるために、仕事も何も選ばない、俺がやれることはなんでもやる。その方がきつくと、楽しく生きられる。まあ、そういうふうには聞いて、いまに至るといって感じですね。